カルナックの夏の夕

岸田國士

画家のＯ君から手紙が来て、静かな処だ、やつて来て見ろといふことでした。
細君からも何か書き添へてあつたやうに思ひます。
巴里から十何時間、ブルタアニュの西海岸で、その昔ケリオンといふ不思議な小人が住んでゐた処です。

宿はさゝやかなホテル・パンシヨン、国道を距てゝ美しい牧場などがありました。
海へも遠くはない。
聖堂の古風な鐘楼、広場の物語めいた泉水、それに、空は低く、森は黒ずんでゐました。

小川のへりに、牛が睡つてゐる。
女はレエスで齧をかくしてゐる。
カンナが赤く黄色く、食堂のテラスに咲いてゐました。

宿には、もう十人近くの客がありました。家族連れが多い。
夕食が済むと、みんなテラスへ出て、話しをしたり、歌を唱つたりしました。グラン・ギニヨル（物凄い芝居）の声色を使つて、女どもを喜ばせてゐる一癖ありさうな若者などもゐました。

ある晩、瓦斯会社に出てゐるといふM氏の細君が、「あなた方は若い方ばかりのくせに、どうして踊らうとなさらないの」と、さも心外らしく、一座の人達を見まはしました。

「ぢや、奥さん、ピアノをどうぞ」Sといふ工手学校の生徒がやり返しました。

食堂には、自働ピアノが置いてありました。

「僕は、風琴弾きを雇つて来ることを提議します」これはTといふ新聞記者でした。

「賛成」口々にかう叫んだ。

読者よ、今こゝで丁度月が出ることを許して下さるでせうか。そして、わたくしが少しばかり物想ひに沈んでゐることを……。

口髭を生やした大男が、風琴を提げてやつて来ました。

「リデエ！」

「リデエ！」

「リデエ！」

娘たちが騒ぎました。

リデエといふのはブルタアニュ特有の踊りなのです。

「さ、みんな輪になつて……」

郵便局の事務員、月給四百法(フラン)のC嬢は、その弟の手を取りました。
「僕は、リデエなんか知らないよ」
「来ればわかるのよ」
わたくしは、O君の方を見ました。踊り好きの細君は、これもいやがるO君の両手を引張りながら、もう足だけは風琴の音に合はせてゐます。
「駄目よ、そんな顔したつて……」
わたくしは、どんな顔をしてゐたのでせう。多分、「君踊るかい」といふやうな眼つきをしてO君の方を見た、それなのでせう。それとも、「困つたことになつ

たなあ」そんな顔をしたかもわからない。O夫人は、御亭主とわたくしを両手に引据ゑて、「さ、あなたはマドムアゼルP……と手をおつなぎなさい。あんたは——と夫の顔を見て——あんたは、さうだ、マダムM、ねえ、ちよいと、奥さん、此の人の右の手を預かつて下さらない」

マドムアゼルP……と呼ばれた少女は、やゝはにかんでゐるらしく見えました。

此の憂鬱な東洋の青年が、恐る恐る差し出す手を、彼女はしばらく見つめてゐました。指は五本ある——彼女は、急に元気よくわたくしの手に飛びついて来た。

実際、飛びついて来たのです。

　人の輪が、静かに、左へ左へと廻りはじめました。単調な、素朴な、そしてなんとなく神秘なその風琴の舞踏曲が、古めかしい民謡のもつ独特な世界へ人々の心を惹き入れました。

　わたくしは、マドムアゼルＰ……と共に、手を振り、足を挙げました。さては、うろ覚えの歌の文句を、低く口吟んで見たりしました。おゝ、故郷の父母よ、同胞よ、そつちを向いておいでなさい。

　わたくしはもう疲れて来た。一人列を離れて、林檎酒（シイドル）のコツプに、唇をあてました。マドムアゼルＰ

……は、前よりも一層快活に踊つてゐるのです。そして、わたくしの方は一度も振向かうとしない。

おそろしく蒸し暑い晩でした。

マドムアゼルＰ……は、その日、水色の支那絹のロオブ、髪は何時もの通り二つに編んだお下げ、象牙まがひの腕環が細い手頸で遊んでゐました。

母親だとばかり思つてゐた、これはまた苦労人らしい中年の婦人は、彼女の伯母さんだといふことがわかりました。

その次ぎには、パ・ド・ルウを踊ることになりました。此の古典的な舞踏は、また若い娘たちをよろこばせました。逞しい騎士の群にまじる美しいプリンセスのやうに、彼女らは、軽く裾を取つて、しとやかに腰をかゞめるのでした。

マドムアゼルＰ……の真面目な顔を見て、わたくしも笑ふわけに行きません。

「あら、違つてよ」といふその眼つきに、惶てゝ歩を踏み直す時など、わたくしの心は暗くなつた。暗くなるだけならいゝが、いやに動悸が高まるのでした。

わたくしはその頃、O君の勧めで、なぐさみ半分に絵を描いてゐました。一緒に絵具箱などをかついで、写生に出掛けたりしました。

カンヴスの周囲に子供たちが集つて来ました。O君の画とわたくしの画とを見比べて、大方の子供は、わたくしの方に寄つて来ました。そして、O君の耳にもはいるほどの声で、「こつちの方がうまいや、ねえ」などゝ、さもお世辞らしく囁いてゐるのを気にしながら、空を青く、雲を白く、そして木の葉を緑に染めてゐました。

マドムアゼルＰ……は、わたくしを画かきだと思ひ込んでゐました。

「肖像もお描きになるの」

踊りが一とわたり済んで、一隅のテーブルに腰を卸ろした二人は、そんな風に話をしだしました。

わたくしはＯ君の奥さんを、一度描きかけて、どうにもならなくなつたことを想ひ出しました。

「いゝえ」

「あら、風景だけ……」

「それから、静物も…………」

やれやれ、マドムアゼルＰ……は、がつかりしたや

うに横を向きました。
「あした、写真を撮つてあげるから、いらつしやい」
さういふことでも云はなければなりませんでした。
人々は夜の更けるのを忘れてゐるやうでした。
新聞記者のＴ氏が、何やら大声で、面白さうな話をしてゐました。いつの間にか、わたくしたちも、その話に耳を傾けてゐました。
「…………すると、婆さんは考へた――今度こそ眼に物見せて呉れよう。
その翌日、婆さんは、何時もの通り、鍋でスープを煮ました。が、その日は、それを火にかけたまゝ、仕

事に出て行きました。
狼は、そんなことゝは知らずに、またやつて来て、鍋の中に顔を突つ込んだ。
——熱いツ——狼は、驚いて舌をひつ込めた。そのはづみに、鍋がひつくり返つて、くらくら煮え立つたスープを、頭からひつかぶりました。
狼はほうほうの体で逃げ帰り、いまいましさうに、この事を仲間に告げました。
——畜生、そんなら、あの婆を食つちまへ、といふことになつた。
その晩、狼たちは、大挙して婆さんの家を襲ひまし

た。
　婆さんは、丁度、おもてゞ涼んでゐました。何十匹といふ狼に取巻かれて、もう逃げるにも逃げられません。しかたがなしに、そばの杉の木に登りはじめました。
「それツ」と、狼たちは、その杉の木の根もとにつめ寄つた。婆さんは、ずんずん上へ登つて行きました。
――やい、降りろ、糞婆！
――降りなきや、振り落とすぞ。
　狼たちは、しかし、此の太い杉の木を揺すぶるほどの力がない。

そこで、今朝、スープで火傷をした狼がかう云ひました。

——お前たち、順々に背中へ乗れ。おれが一番上になつて、あの婆を咬み殺してやる。

——さうだ。

狼たちは順々に背中へ乗りました。だんだん婆さんは危くなつて来る。

——もう少しだ。

一番上の、今朝スープで火傷をした狼が叫びました。婆さんは、杉の木のてつぺんで足を縮めてゐました。狼の口が、裾にとゞかうとする瞬間です。恐ろしさ

のあまり、婆さんはつひ粗相をしてしまひました。……」

どツと、笑ひ声が起りました。マドムアゼルP……は、両手で顔を覆ひました。

T氏は平気で続けました。

「婆さんは、恐ろしさのあまり、気が遠くなつて、つひ、粗相をしてしまひました。

――熱いツ！　熱いツ！

上の一匹が、かう叫んだ拍子に、一番下の一匹が飛び退いたからたまらない。梯子はぐらぐらつと崩れ落

ちてしまひました。

手を折り、足を挫いた狼たちは、熱いツ熱いツと口々に叫びながら、雲を霞と散りうせました」

笑声はしばらく止みませんでした。

Ｔ氏は、徐ろに語をついで、

「ブルタアニユの伝説は、まあ、こんなものです。もつと奇怪な、俗つぽなれのしたのもあります。また明晩……」

マドムアゼルＰ……は、片手で顔をおさへたまゝ、

わたくしの手を握りました。そして、口の中で、「おやすみなさい」と云ひました。

底本：「岸田國士全集20」岩波書店
１９９０（平成２）年３月８日発行
底本の親本：「言葉言葉言葉」改造社
１９２６（大正15）年６月20日発行
初出：「婦人公論　第十年第七号」
１９２５（大正14）年７月１日発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志、小林繁雄
２００６年2月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。